

国際学会におけるリウマチ性疾患調査・研究発表に対する 助成者報告書 (APLAR 2019)

王 興栄 氏 / 東京女子医科大学 整形外科

この度は、公益財団法人日本リウマチ財団の国際学会におけるリウマチ性疾患調査・研究発表助成に採用して頂き、誠に有難うございました。

ここに簡単ではありますが、参加させて頂きました2019アジア太平洋リウマチ学会 (APLAR) の発表報告をさせていただきます。2019年4月8日から11日の4日間、オーストラリア・ブリスベンで第21回アジア太平洋リウマチ学会が開催されました。APLAR は1963年にシドニーで前身組織であったSEAPAL (South East Asia and Pacific Area League Against Rheumatism) がオーストラリア、インド、日本、ニュージーランドの4か国で発足、1968年にインド・ムンバイで最初の国際会議が開かれ1990年韓国・ソウル開催からAPLARと名称が変わり日本リウマチ学会を含め環太平洋27か国で構成される歴史ある国際学会です。

私の発表は東京女子医大東医療センターで診療させて頂いている関節リウマチ患者様の生物学的製剤の治療効果と継続率についての発表でした。多くの海外のリウマチ医の先生方にご興味を頂きご質問を頂きました。医学的な質問以外にも日本の保険診療についても尋ねられました。諸外国の保険制度によっては高額な生物学的製剤の使用制限があり、医師が自由に処方できない事、生物学的製剤の選択制限もある事を知り、各国の医療制度の違いについて有意義な議論の場を持つことができました。また、シンポジウムでは脊椎関節炎 (SpA) の最新の知見について台湾の中山医科大学 James Cheng-Chung Wei 教授、香港中文大学の Lai-Shan Tam 教授の講演を拝聴しました。特にTNF阻害剤を使用しているも強直性脊椎炎の靱帯骨化の進行は抑制できていない事 (mSASSS scoreの上昇)、関節リウマチのT2Tと同様の治療目標をSpAでも作成するために臨床データを国際的な規模で集計をしている事を知る機会を得ました。

昨今はインターネットの医学論文検索サイトPubMed/MEDLINE等で海外へ赴かなくとも最新の医学的知見を手にする事が以前よりも容易になっておりますが、論文で得られる情報は限られており、何にもまして第一線の先生方とdiscussionを通して得られる生の情報程大きな価値のあるものはなく、国際学会に参加する意義を再認識した次第です。最後になりますが、APLAR発表のご指導を頂きました東京女子医科大学整形外科 岡崎 賢 教授ならびに猪狩勝則 准教授、ご支援賜りました日本リウマチ財団関係各位に御礼を申し上げます。